

新編

國語讀本

尋常小學校  
兒童用

卷三

T1A3

10

(K097)



小山左文二合著  
武島又次郎

新編 國語讀本 尋常小學校 兒童用

東京 株式會社普及舎

新編 國語讀本 尋常小學校 兒童用 卷三 目次

だい一	あさ日	一
ダイニ	カザミ	二
だい三	はるかぜ	四
だい四	うんどーくあい	七
ダイ五	あらぬはくせき	九
だい六	五月のぼり	十一
だい七	太ローのはたけ	十五
ダイ八	カヒコ	十七
だい九	きんぎょ	十九
だい十	小さいふね	二十二
だい十一	ほたるがり	二十四
ダイ十二	トリノ王	二十六

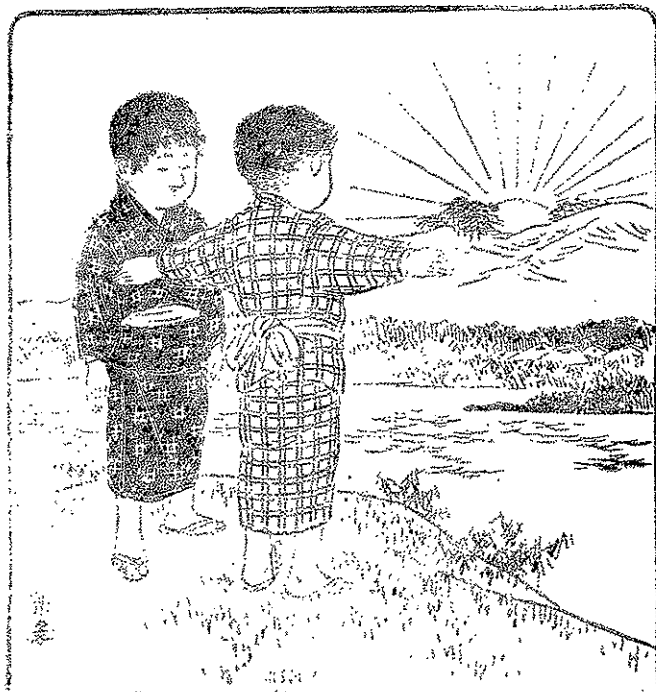


だい十三	田うゑ	二十八
だい十四	木ぎれのいづ	三十一
だい十五	おそろしいゆめ(一)	三十三
だい十六	おそろしいゆめ(二)	三十五
だい十七	おやごころ	三十九
だい十八	ニンギョーノキモノ	四十二
だい十九	まはりどーろー	四十四
だい二十	アキナヒアソビ(一)	四十八
だい二十一	アキナヒアソビ(二)	五十一
だい二十二	ももたろー(一)	五十四
だい二十三	桃太郎(二)	五十六
だい二十四	桃太郎(三)	五十八
だい二十五	松だひらよしふき	六十

新國語讀本 尋常小學 校兒童用 卷三

だい一 あさ日

あれ、ごらん、な  
さい、あさ日が、  
いま、でかかって  
ゐます。  
なんと、りっぱ



ではありませんか。

あさ日にむいてたちますと、まへは

西 ひがし、うしろは西、みぎはみなみ、ひだ

北 りは北であります。

ダイニ カザミ

「カカサマ、アノヤネノ上ニアルトリ

ノヨリーナモノハ、ナンデゴザイマスカ。

アレハ、カザミ

トイフモノデ

アリマス。

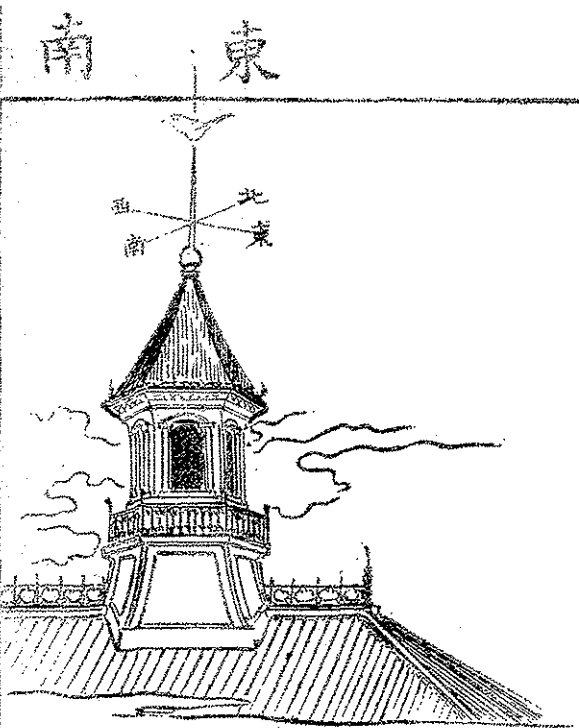


カゼガ、西カラフ

クト、アノカザミハ、

東ヘムキ、北カラフ

クト、南ヘムキマス。



南 東



方

イマ、カガニガ、西ノ方ヘムイデキ  
マスカラ、東カゼデアリマス。

だい三 はるかぜ

かぜが、そよそよとふいて、よいこ  
ろもちであります。

なのはな、やれんげそ、や、すみれが、  
きれいにさいてゐます。

花下



ひばりも、おもし  
ろさうにうたひ  
ちょーも、たのしさう  
にまうてゐます。  
あれ、あのさくら  
の下で、オ花さん  
たちがしーかを



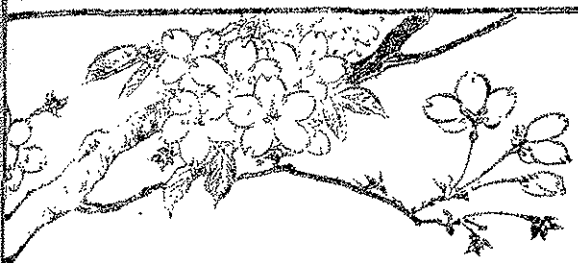
うたつてゐます。さあ、あそこまで、かけ  
くらをしてまわりませう。

○ レンシューダイー

アレ、コチラデハ、花が、チヨ一ノヨ一ニ  
マウテキル。

ヤア、ムカウデハ、花が、ユキノヨ一ニ  
チツテキル。

アレ、マタ、カゼが、東ノ方カラ、フイテ  
キタ。



生



だい四 うんどーくわい

けふは、うんどー

くわいである。いま、

二ねん生のはたと

りが、はじまった。

あれ、ジローさんが、

一ばんについた。



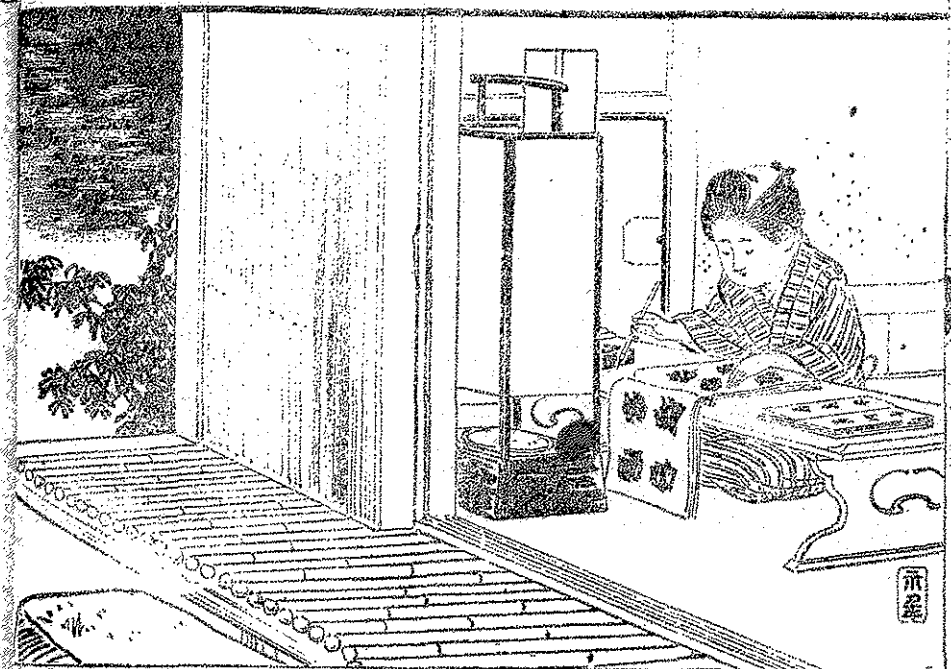
やあ、こちらでは、  
年 三年生のつなびき  
がはじまった。  
ひけよ、ひけよ、  
どちらもひけよ。  
かつたるくみは、  
かちどきあげよ。



ダイ五 あらゐはくせき  
あらゐはくせきトイフ人ハハツノ  
手年、手ナラヒヲハジメテ、アサカラバン  
マデ、ベンキヨーシマシタ。  
日ガクレカカルト、ツクエヲエン  
ガハニモチダシテ、ナラヒマシタ。  
又、ヨルハ、ネムクナツテモ、ソレヲコ



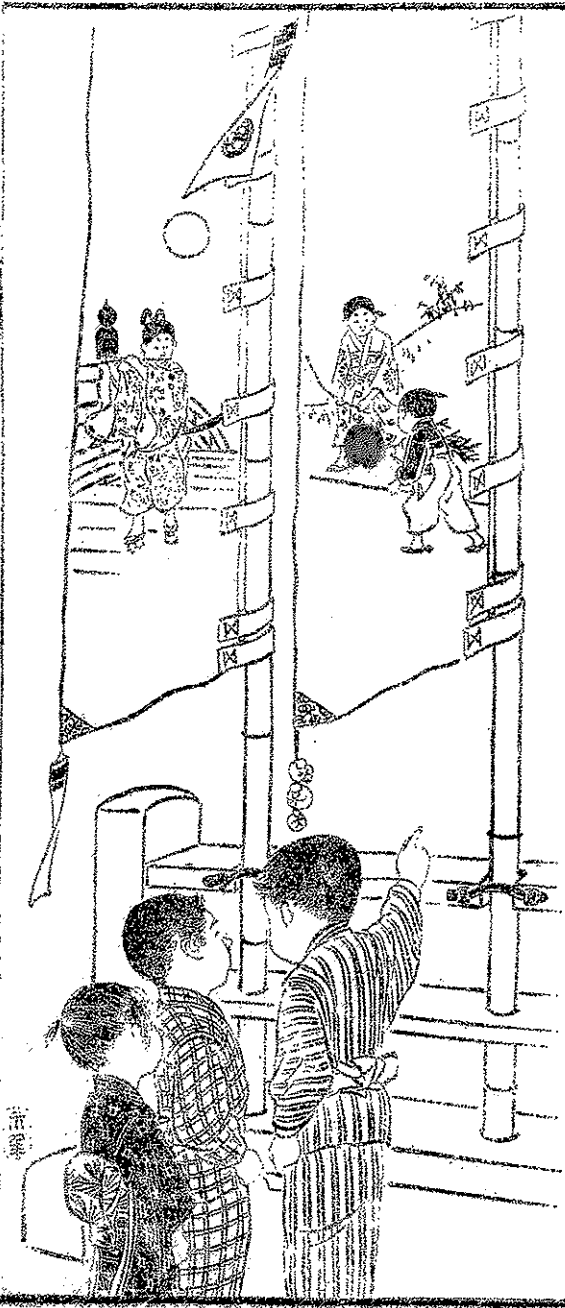
名



ラヘテ、ヨクナラヒ  
マシタ。  
はくせきハ、コシ  
ナニシテ、イロイロ  
ガクモンシマシタ  
エエ、名ダカイガク  
シャニナリマシタ。

だい六 五月のぼり

タロー、きれいなのぼりが二本たち  
ました。みなでてごらんさい。



左

ジロー「あにさん、左の方のふえをふいてゐるのは、とくほんの一でならひましたウシワカではありませんか。」

右 竹

タロー「さよう、よくおぼえてゐました。そんなら、右の方の竹うまにのつてゐるのは、だれでありますか。」

ジロー「しりません。あにさん、をしへてください。」

タロー「あれは、クスノキマサツラといふえらい人です。」

オ花「あにさん、その人は、どういふことをした人ですか。」

天

タロー「天のーさまに、ちゅうぎをつくした人です。」



レンシューダイニ

ワタクシノウマレタ年

月ハヨクワカリマセン

ワタクシハ、左ト右ニ、

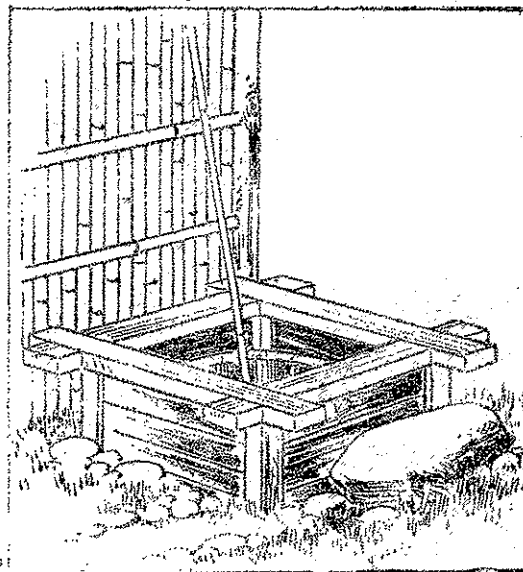
ミミガアリマス。

ワタクシノ手ハ、一本デ、大ソー、ナガクアリマス。

ワタクシハ、マイアサ、ハヤクカラ、牛ドノ水ニ

ハヒリマス。

ミナサン、ワタクシノ名ヲアテテゴラン。



だいセ 太ローのはたけ

太 太ローは、にはのすみ

に、ちひさなはたけを

こしらへて、そこに、

あさがほの

たねをまき

ました。



十日ほどたちましたら、小さいめが  
出ました。

太郎は、まいにち、がっこーからか  
草つると、草をとったり、水をやったりし  
て、せわをしました。

郎 太郎は花のさくのがまたれるであ  
りませう。

ダイハ カヒコ

今 アネサマが、今、  
クハノハヲ、キザ  
ンデヲラレマス。  
私 私モ、ソノオテ  
ツダヒヲイタシ  
マセウ





アレカヒコガ、ヨホド、大キクナリマ  
シタ。

モウ、五六日モタチマシタラ、マユヲ  
コシラヘルデアリマセウ。

糸  
マユガデキマシタラ、ソレヲ糸ニヒ  
イテ、キレイナキモノニシテモラヒマ  
セウ。

だい九 きんぎよ

父  
ある日、ジローの父は、きんぎよを、  
ジローにかつてやりました。

ジローは、よろこんで、そこには、のい  
中  
けの中には、なしました。

きんぎよは、うれしそうに、いけの中  
を、あそびまわりました。

ジローは「かかさ  
ま、あのきんぎよは、  
どうして、およう  
ことができませんか。  
と、とひました。

母

母は「きんぎよは  
をやひれをうごか

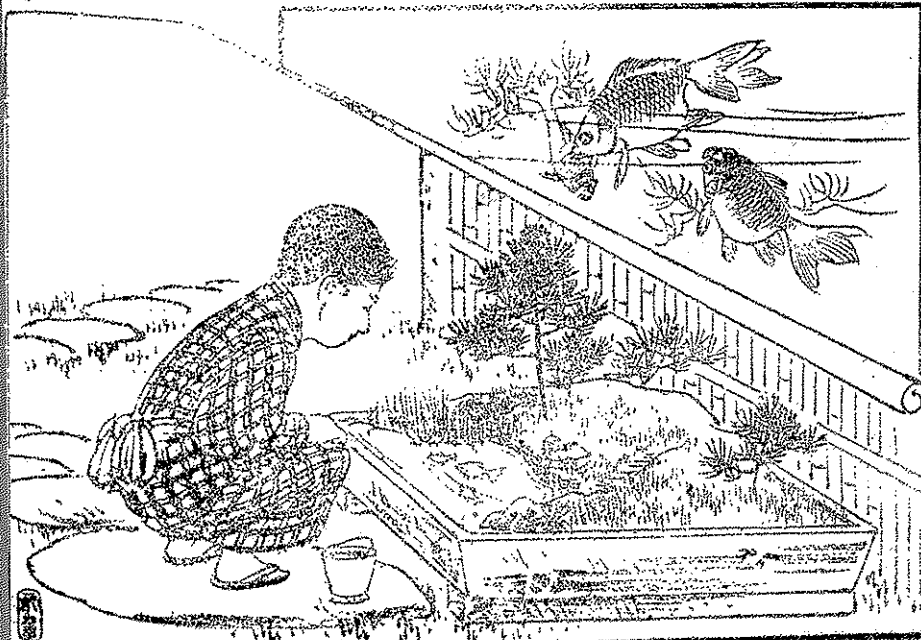
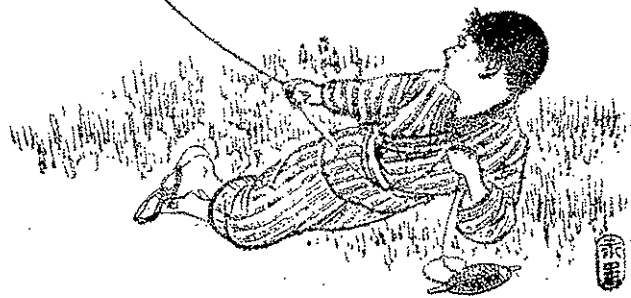
して、おようのである」と、  
をしへました。

レンシューダイ三

太郎ハ父カラ、タコヲモラヒ、  
母カラ、タコ糸ヲモラヒマシタ。  
アレ、太郎ガ糸ヲクリ出シマシタ。

アノナガイヲゴランナサイ、

今、太郎ハ、草ノ上ニネナガラ、  
タコヲナガメテキマス。



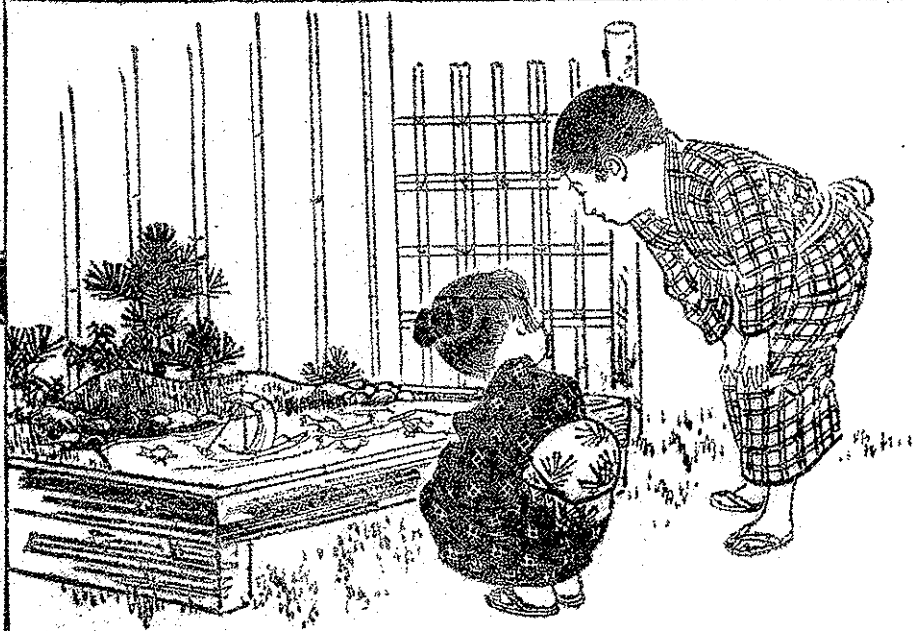


だい十 小さいふね

次 次の日、次郎は、いもうとの才花と、つけぎの小さいふねをこしらへて、はこにはのいけに、うかづました。

船 まもなく、船は、小さいなみにゆられて、うごきだしました。二人は、よろこんで、しょーかをうたひました。

池



きんぎよのひれで、なみたつ池に、ほかけてはしる、つけぎの船よ、むかうのきしに、つけつけ船よ。

だい十一 ほたるがり

夕 竹太郎とオナツは、夕方から、ほたるがりに出かけました。

ほたるこいこい、よい水のましょ。

兄 「兄さん、こちらへ、いつひき、とんで

早 きました。早く、とつて、ください。

あれ、あそこにも、とんでゐます。

やあ、みなにげてゆきました。

ほたるこいこい、

よい水のましょ。

あつちの水は、にがい。

こつちの水は、あまい。





王

ダイナニ トリノ王

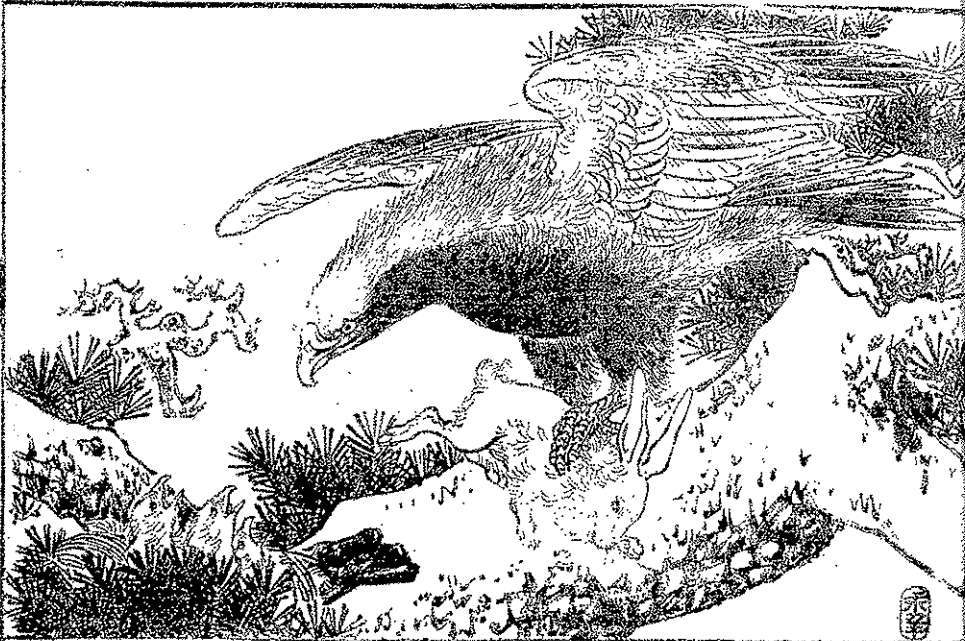
ワシハ、トリノ中デ、一バンツヨイカラ  
トリノ王トイハレテキマス。

爪

ワシノクチバシト爪ハ、大ソー、トガッ  
テ、チョード、カギノヨーニマガッテ  
キマス。

ワシハ、大キナ木ノエダヤ、イハノ上

鳥



ナドニスヲコシラ  
ヘテ、ウサギヤ、鳥  
ナドラ、トツテクヒ  
マス。

ワシハ、カヨーニ、  
オソロシイ鳥デハ  
アリマスガ、ヒナヲ

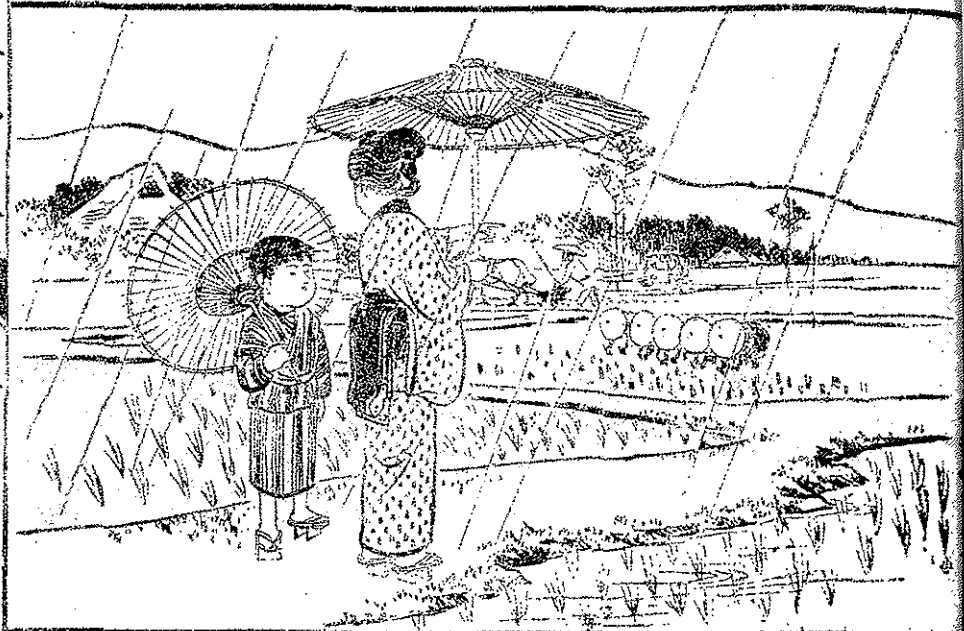
ソダテルヨースハ、マコトニ、ヤサシイ  
モノダトイフコトデアリマス。

田 だい十三 田うゑ

ある日、次郎は、母につれられて、たん  
ぼみちをとほりますと、ちよーど、田う  
ゑのさいちゅーでありました。

百 百しよーは、をとこも女も、あめにぬ

女 苗 米



れて、田をすいたり、  
苗をうゑたりして  
をります。

母は、「おまつらが、  
まい日たべる米は、  
あのよーにはたら  
いて、つくったもの

だから、一つぶでも、そまつにしてはな  
らん。と、次郎にいひまかせました。

レンシューダイ四

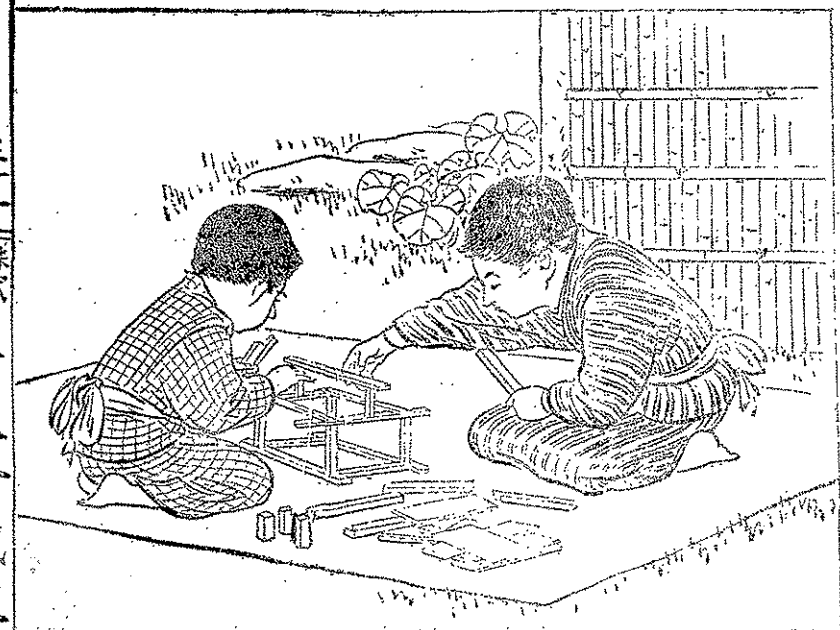
アレ、水鳥が、オヨイデキマス。  
マルデ、船ノヨードアリマス。  
田中サン、アレハナニトイフ  
鳥デアリマスカ。  
アレハ、大カタ、アヒルデアリ  
マセウ。



だい十四 木ぎれのいつ

四郎さん、この木  
家ぎれで家をたてま  
せう。

石  
一ばんさきに、石  
をすゑませう。  
その次にはしら





をたてませう。

それから、やねをふきませう。

戸やしよーじを、たてませう。

ゆかをはって、たたみをしませう。

もんも、たてませう。

松  
松の木も、うゑませう。

さあ、母さまにみてもらひませう。

だい十五 おそろしいゆめ(一)

ひとりのをとこのこがあるひ、たけ  
ざをで、まだじゆくしないももを、たた  
きおとして、たづました。

そのよる、おそろしいかほのものが  
でて、「わしは、けふおまつに、このからだ  
をいためられ、また、こどもをくはれた

もものきである。いまかたきをうちに  
きた。いって、おほきなえだでつきか  
かつてきました。



そのこはおそれて、にげださうとした  
が、あしがたちません。ははをよばうと  
したが、こゑがでません。  
さうするうちに、とーとーぐさど、  
はらをつかれました。

だい十六 おそろしいゆめ (二)

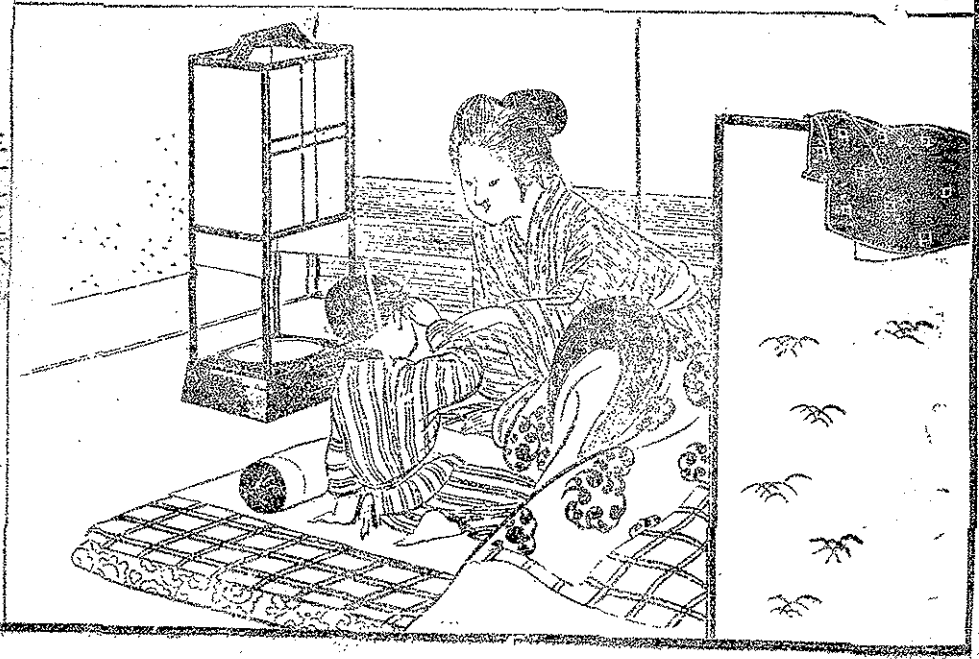
そのこは、あつと、おほごゑをたてて、

さけびました。

ははは、たいそーおどろいて「これ、おまつは、どうしたの。」といって、よびおこしました。

そのこは、「こはいものに、はらをつかれしました。」といって、なきだしました。ははは、「それは、けふ、おまつが、ももの

きをたたいたから、そのよーなゆめをみたのであらう。これから、は、なんなわるいたづらをせぬがよいぞ。」といひまかせました。





そのこは「それでもおなかがいたみます。つかれたにちがひはありません」とまうしました。  
 ははは「それはおまつがまだじゅうしないももをたべたからである。このちはよくきをおつけなさい」とまうしました。

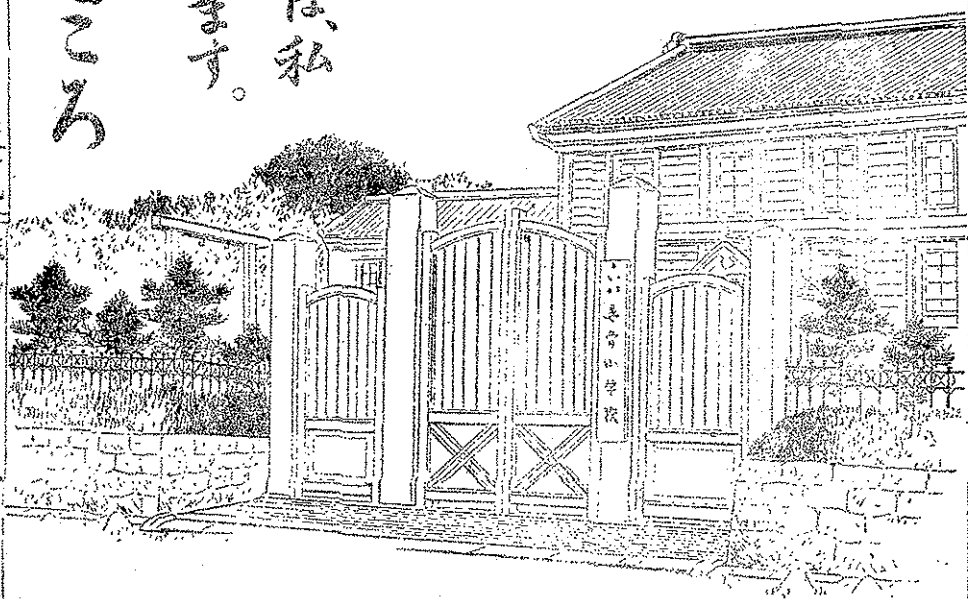
れんしゅーだい五

この大きな家は、私たちのが、こーであります。

けふは、おやすみでありますから、戸がしめてあります。

あの石がきの上の松苗は、私たちが、うゑたのであります。

だい十七 おやごころ



子をおもふ

おやのころは、ふかさがしれぬ。  
うまれるそばから、笑つとおもひ、  
わらふつぎには、はつよとねがひ、  
はつばまたまた、たてよといのり、  
たてばまたまた、あゆめとおもふ。  
おやのころは、ふかさがしれぬ。

子をおもふ

おやのめぐみは、かぎりがあらぬ。  
あつくあらうと、うちはであふぎ、  
さむくあらうと、きものをかさね、  
うまいしょくもつ、たづませようと、  
あせをながして、よるひるかせぐ。  
おやのめぐみは、かぎりがあらぬ。

ダイ十八 ニンギョーノキモノ

お竹ハ、ヲバカラ、ハダカニンギョー

ヲモラヒマシタ。

お竹ハ、母ニ、「ニンギョーノキモノヲ

ヌウテクダサイ。」ト、タノニマシタ。

母ハ、「コレデヌウテゴラン。」トイッテ、

お竹ニ、キレイナキレヲヤリマシタ。

お竹ハ、ヨロコビデ、

母ノソバデ、キモノ

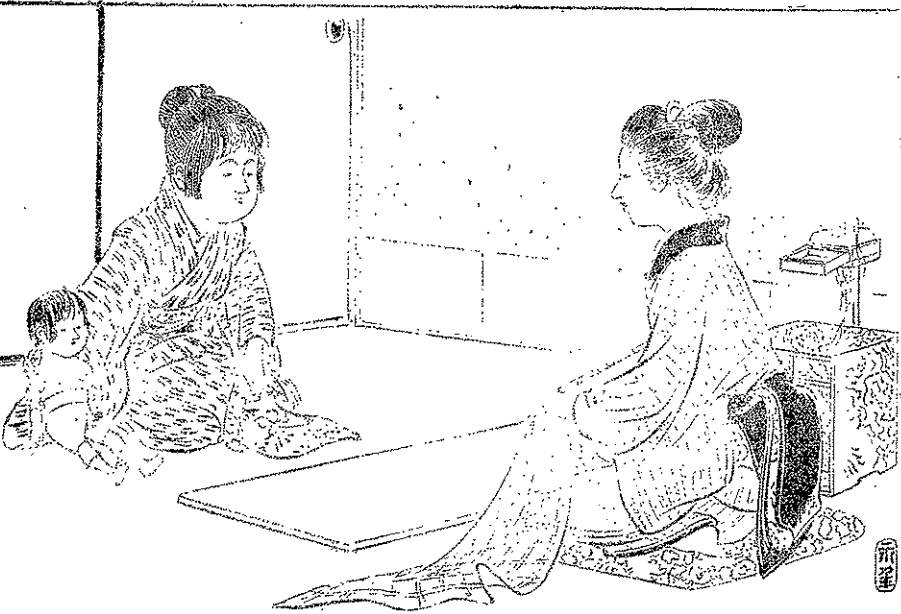
ヲヌヒマシタ。

お竹ハ、ソノキモノ

ノヲ、ニンギョーニ

見

キセテ、ヲバニ見セ





「ババ」オヤ、タイソー、ヨクデキタネ。  
トイッテ、ホメマシタ。

だい十九 まはりどーろー

風  
日がくれて、すずしい風がふきます。  
どれ、えんさきのまはりどーろーに、  
あかりをつけます。

あれ、あれ、もう、まはりだしました。

けんをもった大しよー

馬が馬にのってゆきます。

やあ、大ぼーをのせた

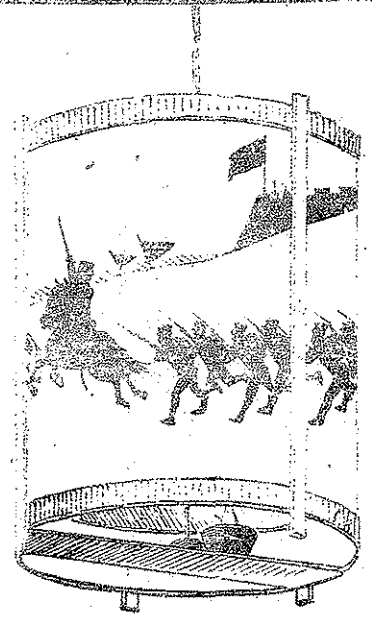


くるまが

出ました。

おや、ついたい

が、たくさん、くり



出しました。

あれ、あれ、てきが、にげてゆきます。

立

たれ、日の丸のはたが、しろの上に立

ちました。大しよーは、けんをふりあげ、

へいたいは、てっぽーをあげてゐます。

おほかた、天のーへいかのばんざいを

となつてゐるのでありませう。

レンシューダイ六

コレハ、

天ノーヘイカノ、オトホリノ

エデアリマス。

リヨーガハニハ、タクサンノ

ヘイタイガ、馬ニノツテ、立ッ

テキマス。

アレ、リップ、パナバシヤが、トホ

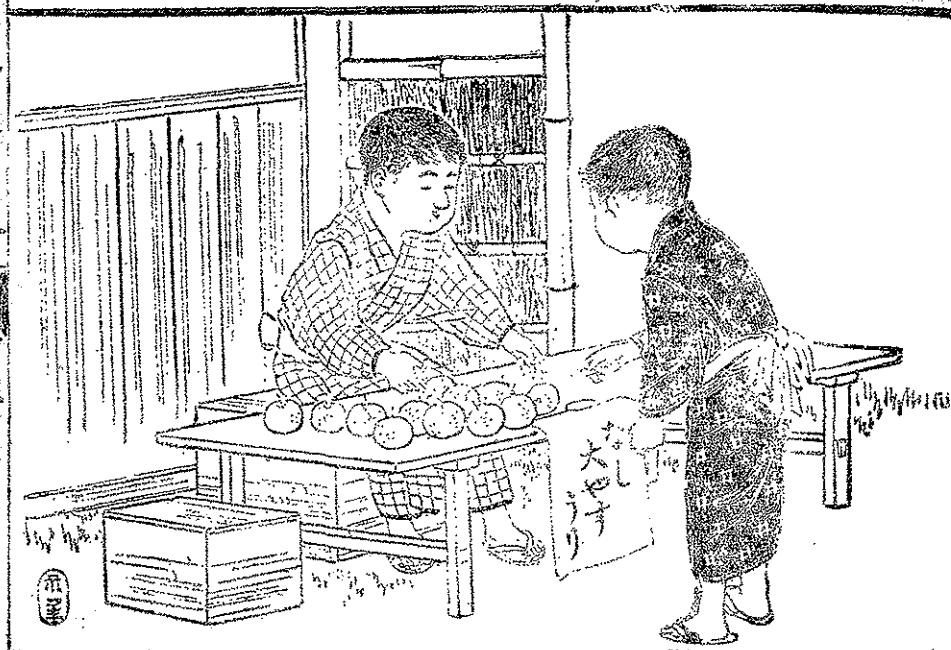
リマス。



ダイニ十 アキナヒアソビ (一)

友  
四郎ハヲバカラ、ナシヲモラヒマシ  
タカラ、友ダチノ次郎ヤ、お竹ヲヨシデ  
キテ、アキナヒアソビヲハジメマシタ。  
四郎ハカミニ、「なし大やすうり」トカ  
キ、次郎ハ小石ニ、「五リン」トカキ、お竹ハ、  
錢木ノハニ、「錢」トカキマシタ。

居



四郎ガカンバン  
ノソバニ、ナシヲナ  
ラベテ居マス、ト、次  
郎ガカヒニキテ、コ  
ノナシハ、一ツイク  
ラデアリマス、カ、ト  
タヅネマシタ。



厘

四郎ハ「ハイ、五厘デアリマス。」ト、イヒ  
マシタ。

次郎ハ「ソシナラ、四ツクダサイ。」ト  
イツテ、小石ヲ四ツ出シマシタ。

金

四郎ハ「オ、金ヲウケトツテ、」マコトニ  
アリガタウゴザイマス。」ト、テイネイニ  
オジギヲシマシタ。

ダイニ十一 アキナヒアソビ 三

コンドハ、お竹が

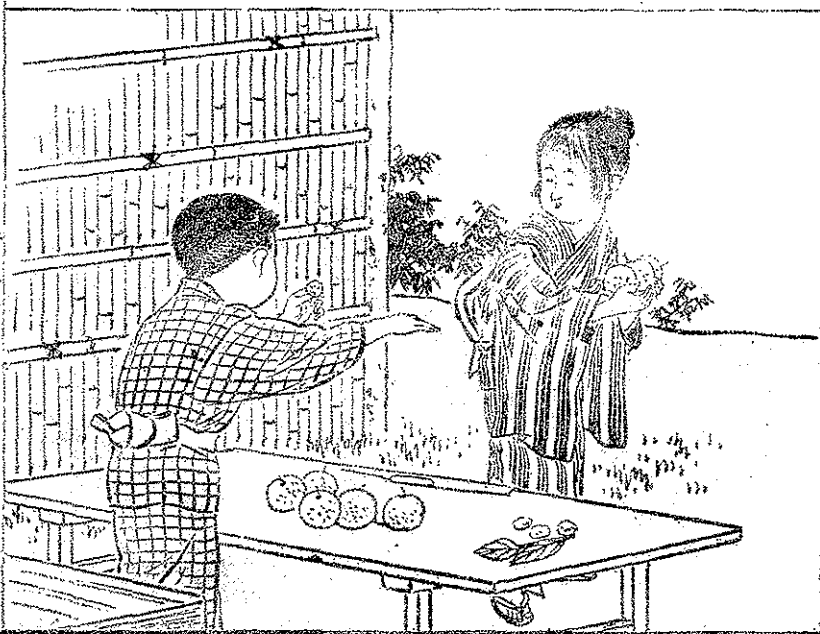
買買ヒニキテ、ナシヲ

三ツクダサイ。」ト

イヒマシタ。

四郎が、ナシヲワ

タシマス。ト、お竹ハ、



枚 木ノハラニ枚オイテ、エキカケマシタ。  
四郎ハ、お竹ヲヨビカヘシ、「オキヤク  
サン、オツリヲアゲマス。」トイッテ、小石  
ヲ一ツワタシマシタ。  
お竹ハ、オツリヲウケトッテ、「オオ、  
店 ショーデキナ店ダコト、マタ、買ヒニキ  
マセウ。」トイッテ、カヘリマシタ。

レンシューダイセ  
竹太郎が、クダモ、  
ノ店ヲ出ス。  
お松が、買ヒニクル。



が十枚デ

が五枚デ

が二枚デ

だい二十二 ももたろー(一)

昔

昔あるところに、ぢぢとばばがあり  
ました。ぢぢは、やまへしばかりにばば  
は、川へせんたくにゆきました。

桃

ばばが川から、大きな桃をひろって  
きて、ぢぢにみせ、一しよにたべようと  
しますと、ももがひとりであれて、中か

男

ら、きれいな男の子  
が生まれました。

二人は、大々、

よろこんで、桃太郎と

名をつけて、だいに

そだてました。

桃太郎は、だんだ



力ん、大きくなり、力もつよくなりました。

だい二十三 桃太郎 (二)

ある日、桃太郎は、おにたいちをし、うとおもつて、きびだんごをこしにつけて、おにがしまの方へ出かけました。山みちで、一ぴきのさるが出て、桃太郎さんどこへお出でなさるか。

「おにがしまへ、おにたいちに、おこしにつけたは、なんでござる。」  
「日本のきびだんご、一つください、おともしませう。」





桃太郎は、さるに、きびだんごをやつて、  
ともにつれてゆきますと、また、きじと  
犬があとをおうて、きました。

桃太郎は、これにも、だんごをやつて、  
ともにつれました。

だい二十四 桃太郎 (三)

桃太郎は、おにがしまについて、おに

どもの居るしろの  
もんを、うちやぶり  
ました。

おほくのおには、  
かなぼーをふつて、  
手むかひましたが、  
とーとー、こーさん



しました。

物 物を、さし出しました。

車

桃太郎は、そのたから物を車にのせ、犬さるきじにひかせて、おちばはへのみやげ物にしました。

ダイニ十五 松だひらよしふさ

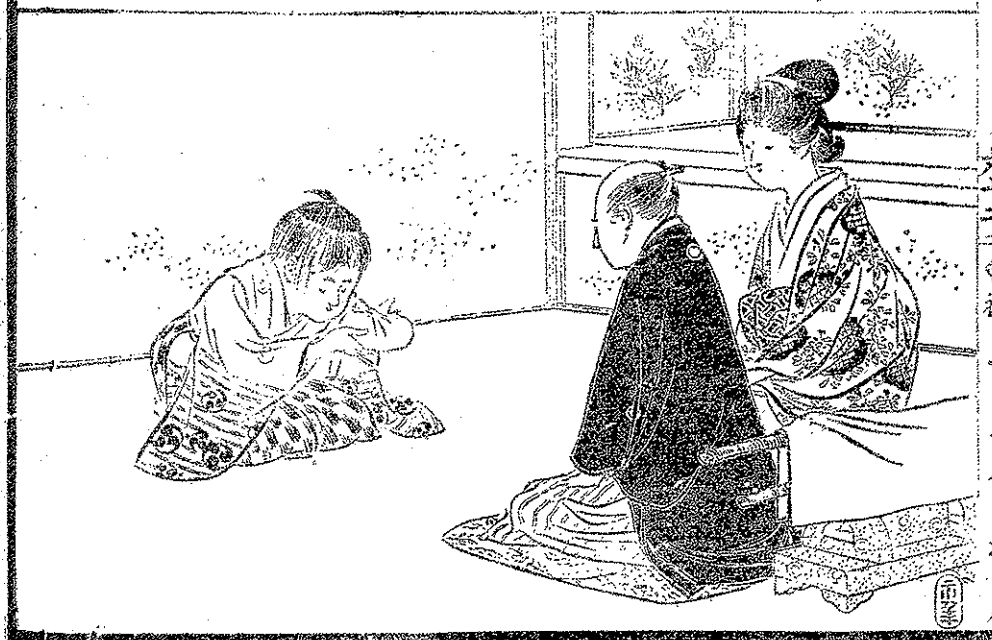
外 松だひらよしふさトイフ子ハ、ヨク

内 ルトキト、内ニカヘツタトキニハ、キツト、

父母ニツゲマシタ。

人カラ、物ヲモラツタトキハ、父母ニ上ゲ、又、父母カラ、物ヲモラツタトキハ、オレイヲイツテ、イタダキマシタ。

父母ガビョーキ  
ノトキハイツデモ、  
ソノソバヲハナレ  
ナイデ、カイホー  
シマシタ。  
ダレモ、よしふさ  
ノヨーニ、オヤコ

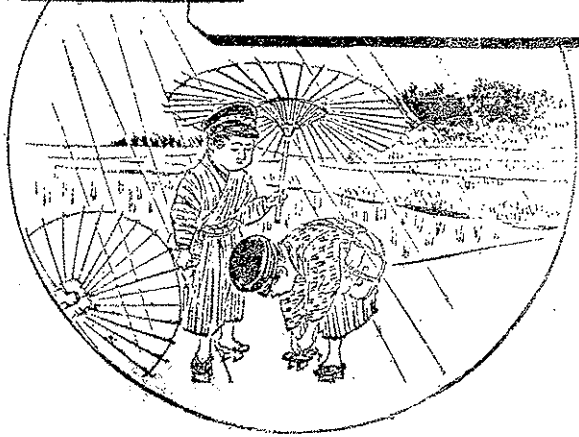


コヲセネバナリマセン。

れんしゅーだいハ

父母には、  
こーこーが  
だいじ。  
友だち  
なかまは、  
しんせつが  
だいじ。

男も女も、  
べんきょーがだいじ。



しごとをするには、  
めと手がだいじ。



家の内外は、  
そーちが  
だいじ。

をはり

明治三十四年六月廿五日印  
同 年六月廿八日發 行 刷  
明治三十四年八月四日訂正再版印刷  
同 年八月八日訂正再版發行

新編國語讀本 零卷

甲種	乙種	丙種	丁種	合計
壹圓	九角	八角	七角	金九十九錢
壹圓	九角	八角	七角	
壹圓	九角	八角	七角	
壹圓	九角	八角	七角	
壹圓	九角	八角	七角	

明治三十四年八月十六日  
文部省檢定濟

不許  
複製

發賣所

著者 小山 左文二  
著者 武島 又次郎  
發行者 株式會社普及舍  
代表者 山田 禎三郎  
東京市神田區南藥物町十番地  
帝國書籍株式會社



圖書 和圖書 備



a 1 1 1 1 0 3 9 1 1 6 a

福岡教育大学蔵書